露伴と道元

瀬里広明

露伴と道元

瀬里広明著

創言社

瀬里広明（せりひろあき）
1919年　福岡県生れ。
1948年　九州大学法文学部
　　国文学科卒業。
現　在　鹿児島経済大学社
　　会学部教授。
著　書　『文明批評家として
　　ての露伴』（未来社）
　　講座『禅』―「禅と文
　　化」共著（筑摩書房）

露伴と道元

一九八六年十一月十五日発行

著者　瀬里広明

発行者　村上一朗

＊

812 福岡市博多区千代一-19-12

発行所　創言社

振替　福岡5・3135

目

次

露伴と道元における愛……三
仙書参同契と正法眼蔵
——露伴における東洋と西洋——……四九
繫念……一四一
1 露伴文学のキー・ワードとしての繫念 一四三
2 露伴の生命哲学と繫念 一五五
3 繫念の原点とテオソヒイ 一七四
4 儒教における繫念 一九〇
5 繫念思想の形成——禅・茶・俳・儒—— 二一六
6 「風流仏」に現れた繫念 二三四

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

7　宗教の信と「天うつ浪」の繋念　二四七
8　仏教の観と繋念　二五七
9　道教の扶鸞の術と降霊魔術　二六二
10　天の道・気の道・人の道　二六六

「観画談」とその背景……二八三

露伴の貧窮観
——貧窮の創造的意味——……三三一

あとがき……三九九

露伴と道元

露伴と道元における愛

1

露伴が道元についてまとまった文章を書いたのはない。しかしあれほど仏典について造詣が深く、『大蔵経』を二回も読破したという露伴のことであるから、道元の『正法眼蔵』にも眼をさらして、一隻眼を有していたであろうことは疑ないところだ。私は露伴の「仙書参同契」や『努力論』や「一貫章義」などを読んでいるうちに、露伴的視点から道元禅はどのようになるであろうかと考え、今から十五年前に、「仙書参同契と正法眼蔵——露伴と道元——」という一文をものしたことがあった。これについては禅に造詣の深い西谷啓治氏より、道元禅を道教の方から見たところに特色があるとの葉書をいただき、問題の所在の深さにはっと気づかせられたことがあった。

「仙書参同契」は露伴晩年の作品で、古来から難解とされてきた『周易参同契』の本質を解明したもので、仏教渡来以前にすでに中国に婆羅門のヨガに類するものが仙道の一派、丹道としてあり、また禅宗にも類似するところがあるなど指摘し、自然と人間の根元にある宗教的生命に迫った露伴晩年の傑作である。こうしたところが「仙書参同契」から『正法眼蔵』を見る私の論文の手がかりとなったのである。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

今度私が再び露伴的視点から道元にアプローチしようとするのは、露伴の儒から道元禅を愛を中心として見てみようとするものである。儒教と仏教はたしかに異質のものである。しかし露伴が少年時代から青年時代にかけて学んだ儒学は宋学であって、漢・唐・清の訓詁的、考証的儒学に比すと、仏教的、道教的気味合いの濃い哲学的なものであった。この露伴の儒は文学作品の中において、道徳的教訓調を帯びているところがあり、それを読んで現代の馬琴かと、文学青年風に一笑し去ることは、今日の批評家研究家にはいないであろうが、まだまだ露伴の思想家としての像は明らかとなっていないのである。儒教・仏教・道教、そしてそれらの綜合である宋学などに思いを寄せて、露伴の内実を考えてみると、道徳的、教訓的といってすませるほどことは単純ではないのである。一種の儒教文学と思われる「悦楽」や「一貫章義」において特にその感を深くするものである。彼は「仙書参同契」の中で、もし孔孟の道にも「悟得」するようなものがあるとすれば、丹家の「還丹」と遠いものではあるまいと評したくなるのも無理ではあるまいといっている。これから判断しても、彼の孔孟観が一般のそれをはるかに超えていたことが分かるというものだ。これなどよほどの深い自然と人間の内的体験なくしてはいえないものである。これは次の言葉によって裏づけられるであろう。「性命の源頭盡頭を観照識認し得て正しき修煉を積み、以て生死を超越し、大自在境に在らんとするのが真の僊道丹道の所期である。仏教で無量

寿といひ、基督教で限りなき生命といふのも、何も貪生念願の成就といふのではない。それらの無量寿を得、限り無き生命を得るといふのと恰も同じく、生死を超越して大自在境に帰するが即ち僊を得たのである。[1]」ここでは孔孟の道については触れられてはいないが、丹道での「還丹」が「生死を超越して大自在境に帰する」ものであることが示唆されていることから、孔孟の内奥にあるものが何であるかを知ることができよう。孔孟の道はその内奥から発しているのである。したがってそこに源泉がもとめられる露伴の文学上における道徳的、教訓的観念を安易にとることはできまい。彼は深く道徳の根元にまで下降しているのである。この態度は彼の青春時代学んだ宋学に由るところが多いのである。朱子にも「参同契考異」の著作があり、『周易参同契』には深い関心を寄せていた人だ。朱子を学んだ露伴がさらに深い関心を寄せたことに不思議はない。

それでは彼の儒が宋学そのままであったかというとそうではない。宋学の中核をなす朱子学についてみても、朱子の理気説は露伴の詩的世界に溶解してしまっている。彼の『努力論』中にある気説などを読めば、どこに宋学の面影があるかと思わしめられるほどである。

気の思想は最近学界や思想界でも注目されてきているものであるが、東洋思想の中でも分かりにくい用語の一つである。それが露伴の文学的営為によって、近代人に理解のゆく

ように説かれたのである。実に彼は気の詩人思想家であり、近代における気の研究の先駆者でもあったのである。気の思想は宗教、道徳、芸術、科学にもかかわっていくものであって、露伴が大正時代の初め、すでに気の思想の重要性を指摘していることは、近代日本哲学の先端を歩んだ西田幾多郎とは異なった思想の道を歩んでいたことを示すものであった。気は宗教、芸術、道徳、科学だけではなく、気の道として、政治や経済においても重要な意味を持つものである。

次の文は雑誌『実業之世界』（大正十四年二月号）に掲載されたものであるが、彼の気説の中心にあったものが何であったかを窺うに足るものである。

「元来元気は自然の発生である。或る時節に到達すると土の中にこぼされてゐた種が芽を出す。草木の種子より出づる芽は、自分自身どう云ふ心持を持つてゐるのか推測することが出来ぬが、天地の具合が芽を出させるに好適な時に於て、間違ひなくその芽を出す。温度と濕度の具合が丁度甘（うま）く種の中の変化を引き起し、芽が殻を破つて出づるに適した状態に至つて、その芽は煙の如く微々として萌出（もえい）づる。この力、この精気を名付けて元気といふのである。

人が他の人と接して人類相憐の情が油然として起る。この油然として起る人の心を仁（じん）といふが、種の中から萌出す力の本源は即ちこの仁である。双方、同じものである、

故に種の中に含まれてゐるものを矢張り仁と称する。杏仁、桃仁なぞといふのが即ちこの仁の意味である。すべて物の発生する真の気を元気といふのである。そこで元気と仁とは同じ事である。すべて世界の事物は、みな斯くの如き生々の道理から成り立つものであつて、この生々の道理が、気数に偶された時にこれを元気と云ふので、元気も仁も別のものではない。仁の働きだしが元気である。これを外にして真の元気はない。[2]」

このような詩的な仁の描写によって分かるように、彼の儒は道徳的倫理的な範疇を超えているのである。ここに描かれている仁の思想は宋儒の中にもないではなく、彼の独創的見解とはいい得ないものがあるが、気を仁と結びつけて詩的に自由に説いているところなどは、宋儒も日本の儒者も容易にはしていないところで、これは詩人としての彼の天性の資質によるものであった。「人が他の人と接して人類相憐の情が油然として起る」ことと、「種の中から萌出す力の本源」とが別のものでないというところに、彼の仁に対しての深い詩的直観がある。

朱子が仁を「愛の理・心の徳」といったのは、常識的な愛の倫理をいっているのではなく、実に微妙な深い意味を含んでいたのである。愛は人類相憐の情であるとともに、人や物を生かす力でもある。愛がなくなること、仁心のなくなることは、元気のなくなることであり、

その人の衰えであり、一個人の上でも、一国家の上でも、元気の量は仁心の有無をもってはかることができるとさえ露伴はいっている。それでは直ちに仁即愛といえるかというとそうはいかない。孔子が仁を恭・寛・信・敏・恵[3]と説いたりしているのは深い理由があってのことである。ここでは恵が愛に相当するものである。儒教では愛は仁の一科なのである。しかし愛をもって仁を深く解していくことを妨げるものではない。基督教において神は愛であるとしたのは、愛を聖化したもので、儒でいえば仁即愛ということになる。これは仏教の慈悲についてもいえることである。仁、愛、慈悲と、言葉はそれぞれ異なるが、孔子・基督・仏陀の悟得したものは、言語表現を絶した天地生成の力すなわち元気であったのである[4]。元気は『南華経』の一気と同じものである。

今ここに人間の内部にある仁において、慈悲はどうなっているだろうか。露伴は慈悲を分析して次のようにいっている。

「大慈大悲といひ、悲願悲心などいふ『悲』は、皆『慈』の強くて堪りかぬるところを云ふのである。慈の『いつくしむ』と悲の『かなしむ』とは、一応は異なれども、深く立入り考ふれば、同じところがあるのである。『あはれ』といふのも、至極の美はしく好もしきものに臨みて、『哀れ』といふべくは無きやうなれど、感歎の極には涙さへ浮ぶに至るところがある、そこを『あはれ』といふのである。飢ゑて死せんと

する如き人に臨みてあはれむのと、吾が愛する妻子を憐むのと、同じく『あはれ』と云うたのでは、釣合はぬやうだが、よく〳〵觀ると、心の奥のすがたには同じところがあるのである。皆是れ愛である。」（「愛」）

春になって芽が出るのと、人類相憐の悲願悲心とが同じものであるように、心の奥のすがたは自然が人間に植えつけたものである。これはさきの露伴の元気に関する一文で会得することができよう。

基督教や仏教がともに世界の大宗教として人類の道念を養ってきたことを露伴はみとめ崇敬していたが、儒の教えに比すると、日常的な教えにおいて十分な面のないことは否定し難いものとした。それは愛につきない面を内に含む仁の性格によるものであった。彼が「悦楽」で基督教や仏教を批判したのはこの点であった。

儒教では一本の筆や鉛筆に対してすら仁を要求するのである。人はそれを大げさというかもしれないが、これを扱うに道をもってしなければ、物は役に立たなくなってしまうものである。道とは仁道のことである。

「蓋我が聖賢伝来の道は、正心誠意〔大学〕といふも、忠恕〔里仁篇一貫章〕といふも、名は名づけ指すに従つて様々なれども、畢竟人の本然の素直に美しきところを以て、素直に美しく事物に応じ行くまでにて……

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com